



神水遺跡 (くわみずいせき)

神水遺跡は託麻原台地の縁辺部に位置し、江津湖や水前寺公園などの湧水地点に接している遺跡です。この遺跡では、縄文時代から中世に至るまでの生活の痕跡が確認されていますが、中でも弥生時代と奈良・平安時代の資料が充実しています。



弥生時代の甕棺

これまでの発掘調査で、弥生時代の中期から後期にかけての集落の様相が明らかになりつつあります。

遺跡の南側一帯には、竪穴住居群が密集する居住域が広がります。一方、墓域は居住域から外れた一段高い区域と、居住域に隣接した区域にそれぞれ営まれることが近年の発掘調査から明らかになりました。

なお、朝鮮半島との関わりを示すものが竪穴住居などから出土しています。なかでも、鑄造鉄斧は破片を再加工し、鑿（のみ）として使用されていたことが明らかとなっていることから、舶来の貴重な品を無駄なく利用していた様子がみてとれます。

8世紀半ばの遺跡周辺においては、肥後国府あるいは託麻郡衙・国分寺および国分尼寺（陳山廃寺）が設置され

ていたと推定されており、奈良・平安時代の資料が急激に増加します。このことは、官衙と考えられる大型の掘立柱建物が発見されていることや「厨」（くりや）（食料や食器の管理を司る公的施設を示す）と書かれた土器が多いことから推測されます。

9世紀後半以降になると、集落が衰退していきますが、それは国府あるいは郡衙の廃棄・移転に関連があるかもしれません。



弥生時代の竪穴住居群